

透析医療の発展

「不易を知らざれば基立ちがたく、
流行を知らざれば風新たならず」

三村 洋美*

この言葉は、物事の原則である基本を忘れず流行を取り込み、新たな風を起こして発展をするという意味で、松尾芭蕉の俳諧の基本理念のひとつである（去来抄）。透析医療もこの言葉のごとく発展を遂げてきて、今後もさらに発展をするだろう。

40 年前に臨牀透析が発刊された頃、女性の平均寿命が 80 歳を超えたことがトピックになっている。現在では、男女ともに平均寿命は 80 歳をゆうに超え、女性は 87 歳となった。さらに 90 歳まで生存する人の予測値は、男性 7 %、女性 16 % から、令和 5 年には、男性 26 %、女性 50 % となり、日本国民は長生きになった。人々の病気を治し寿命を延ばすことを目指して、絶え間なく新たな薬や治療へのチャレンジがあったからこそである。これは、医療の素晴らしい功績である。

その頃の透析医療の現場はどうであっただろうか。保険収載される前の透析医療（57 年前）は、まさにお金があれば生きることが許されず、さらにそれ以前の 1960 年代はじめには「シアトル神の委員会」という話まであった。35 年前に看護師（当時は看護婦）になり、病院での治療は延命に最も注力されていたことを記憶している。一日でも長く生きることを目指すのが医療であった。“もう透析はしたくないです” という患者に、“最期まで一緒に透析

* 昭和大学認定看護師教育センター

を頑張りましょう”と言った自らの発言に違和感をもったことを忘れない。医療の原則は何だろうか？患者は意思をもつ個人であり、患者の尊厳が原則である。その時代には、一日でも長く生きることが個人の尊厳であると多くの人々が若干の違和感を持ちながらも理解していたのだと思う。ひと昔前は病気を治せるような医療に価値をおき、新しい風を吹き起こした時代だったのだろうと振り返る。

現在、超高齢社会の中、透析患者も長生きになった。新たな風を吹き起こしながら、新薬や治療の開発はさらに進む。新しい看護のケアも日進月歩を遂げている。その中で、一人ひとりの患者の個人の尊厳を考える時、いつか人生を終える日まで納得して生きて最期を迎えることが重要であると思う。透析患者の意向を丁寧に聴き、希望を一つひとつ叶えていくことが原則であると、現在の透析医療において合意が進んだように感じる。患者の望む生活のためには、どのように透析をするのか、そのためにはどのような支援を行うのかについて、最新の治療やケアの知見を活用して提供をするステージにたどり着いた。医療全体が、個人の尊厳を踏まえて医療の基本を忘れず流行を取り込んで前進していくことを透析医療が牽引できると確信している。